

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前：毛受 芳高（めんじょう よしたか）
(2) 年 齢：49歳
(3) 参加事業：第8回「世界青年の船」事業（1995年）
第10回「世界青年の船」事業（1997年、ナショナル・リーダー）
(4) 職 業：一般社団法人アスバシ代表理事
NPO法人アスクネット 顧問・ファウンダー
この他、複数の法人の役員兼任



■応募のきっかけ

大学では ESS という英語サークルに所属していました。ある仲の良い先輩が第4回「世界青年の船」事業（以下、「世界船」）に参加するということを聞いていたのですが、ある時、その先輩が真っ黒に日焼けして、充実した顔で部室にいました。先輩に「世界船、どうでしたか？」と聞いてみたら、目をウルウルさせながら「すごくよかったです～！」と言って、2～3時間ほど、「世界船」の話をとうとう語ってくれました。「毛受くんも受けたらどう？」と勧められて興味を持ち、大学院入学後、とりあえず申し込んでみようと、軽い気持ちで応募したのがきっかけです。

先輩の話のどんなところに魅力を感じたのですか？

ルームメイトの外国青年の足が臭かったという話です。まったく別の地域・文化背景をもつ3人が同じ船室で暮らす。海はきれいで、ご飯はおいしいし、すごくいいんだけどルームメイトの足が臭くて。そのことを本人にずっと言えなかった。でも、最後にやっと言えたんだそうです。なるほどなあと感心しました。すでにいろいろな国際交流事業を体験していて、最初から「仲良くなりましょう」的なプログラムに食傷気味だった私にとって、この話は非常におもしろかったです。

■他の国際交流事業との違い

まず、環境が違う。一般的な国際交流の場合、「ホーム」と「ビジター」に分かれていることが多く、主催者（ホスト）側、つまり、受入れ側であるか、あるいは訪問客（ゲスト）側であるかがはっきりしています。でも、「世界船」の場合、交流の舞台が海の上ということもあって、だれがホストで、だれがゲストかという区別をあまり感じません。航海中の船は完全に独立していて、まるで2ヶ月間だけの独立国という雰囲気があり、独自のルールに基づいて活動が組み立てられています。自分の背景や経歴などまったく知らない人たちの中で、一から他の仲間との関係を築き、そのコミュニティの中で自分の役割を発見できたことは、大きな自信になりました。

所属していたグループでは、カタールの青年がグループ・リーダーで、もう一人の日本人がアシスタント・グループ・リーダーを務めました。グループにはいろんな国の青年がいますから、日本では考えられないような主張をしてくる人が出てくることがあります。「こういうルールがあるから」と説明しても、「日本人はそんなに生真面目にやっててどうなるんだ。もっと人間に生きた方がいい！」などと言ふんですよ。

グループ内で意見が食い違って、気まずい雰囲気になり、仲裁に入ったこともあります。「せっかく参加したんだから、どちらが悪いとか言っていないで、最後は水に流して、気持ちよくプログラムを終えよう」と言って、もめている人たちを説得するわけです。下船直前になって、仲たがいしていた人たちが抱き合って別れを惜しんでいるのを見ると、涙がでてきました。「最後までがんばってよかったなあ」と思いました。

「世界船」では、自分の得意なこと、自分が苦手なことがはっきり分かりました。自分は個性の強い人たちの間で、「まあ、そんな風に言わないで…」などといって、うまく調整できるのがうれしいようだと気づきましたね。人間として、いろいろな面で試される日々でしたが、充実感でいっぱいでした。

「船」という特殊な空間だからこそ顕著に際立つ体験がありましたか。

世界船は、共同生活をするというのが大きいですね。他の事業ではホテルなどを使うことが多いので、どうしても表の顔だけを見せることになります。ホテルから出かけていくこともできますしね。もちろん、船内でも最初はそれぞれの国を代表して行動しています。「私は UAE の青年です」といった感じです。でも、1か月もたつと、「〇〇さん」という個人として認識されるようになります。船上は逃げ場がないので、みんなありのままで向き合わざるを得ないです。それが船の良いところですね。

イスラムの人と一緒に過ごすことで、イスラム文化のアリティを感じることができました。みんなで映画「シンドラーのリスト」を鑑賞したことがあります。裸の人が出てくるシーンがありますけれど、別に過度な性的な描写ではない。それなのに、裸の人が現れると、あるイスラム文化圏の青年たちが自分の目を手のひらであわてて覆うんですよ。心の中でみだらな感情を抱くのすらよくないんだそうです。一方で、同じイスラム文化圏の国のはずなんだけど、別の国の青年たちは全然気にしていない。「旅行中は見てもいいんだ」などと言っている。みんないろいろあるんだなあ、やっぱり人間なんだと思ったのが、目からうろこの体験でした。

プログラム中に遅刻者がたくさん出たことがありました。決められた時間に戻って来ない者は、皆の前で謝罪のスピーチをさせられました。ある青年がすごいスピーチをしたんです。I'm sorry と一応言っているんだけど、全然謝罪になっていない。「目の前に病気の人が倒れていたとしても、その人を助けないで、Be punctual, 時間通りに戻って来ます」とか、「二度と会えないような運命の人と出会っても、Be punctual だから時間通りに戻って来ます」とかいう非常にシニカルなスピーチをしたんです。これを聞いて、参加青年がどっと笑って拍手までし始めた。「もっとやれー」という感じですよ。でも、いつもは優しい日本人のナショナル・リーダーが英語で「それは違う！」とカツを入れた。だらけた雰囲気に沸いていた青年たちが一瞬で我に返って、場が引き締まったのです。あれはすごかった。自分はいくら英語ができるといってもそこまではできないと思いました。あの時のナショナル・リーダーのような英語力がないと、だらけた青年たちにカツは入れられない。説得もできない。かっこよかったです。国際社会のダイナミズムを感じた一瞬でした。

■自分に自信を持てるようになった

船に乗る前、自分はそこそこすごいんじゃないかとか思っていたら、同じ年代でもっとすごいことをやっている日本人青年に会いました。その人は今、国会議員なんですけどね。なんてくだらないことで自分はすごいと思っていたのかとすっかり自信がなくなりました。でも、船に乗ったら、そういう悩みはどうでもよくなりました。やっぱり大切なのは「人」としての在り方なんだと思うようになったんです。いろんな背景の人がいろんな考えのもとに船に乗っている。その中で一定の存在感のようなものを示せるようになって、みんなから「めんじょう、めんじょう」と慕われるようになりました。正義や理屈だけでは測れない人それぞれの事情を考慮して、仮説をたてて、コミュニケーションすると結構うまくいくものなんだということを実感しました。「人情の毛受」と呼ばれるようになりました。いざこざを丸く収めることができたのは、大きな自信につながりました。

船ではプレスクラブに所属して、レベルの高い論評が掲載されるすばらしい新聞を毎日発行していました。この新聞制作の指揮をとっていたのが辣腕の日本人青年で、ロジカルで強力なリーダーシップを発揮する人でした。「みんな、ついで来て！」という感じなんですが、みんなの意見をしっかりとまとめ上げていくんです。私は Mac (マッキントッシュ) を船に持ち込んでバックアップやサポートを担当し、彼女の強いリーダーシップをフォローするという立ち回りをしていました。リーダーシップにもいろんな形があることを経験し、自分のやり方でもいいんだと気が付いたのもよかったです。特に、2回目にナショナ

ル・リーダーとして乗船した際には、リーダーとして、寄港地や帰国時に英語でパブリックスピーチをする機会があったことは良いトレーニングの機会になったと思います。

■内閣府の事業でしか得られない経験とは

船というものを使った国際交流、外交筋を通じた参加青年募集は、国でなければ実施できないレベルの規模と幅広さがあり、**世界でもありえないレベル**のコミュニティとエキスペリエンスを形成できます。島国ならではの発想もありますが、その分、ユニークで深い体験ができると思います。

「世界でもりえないレベル」とは具体的にどのようなものでしょうか。

あらためて「なぜ船で交流事業をするのか」と考えました。船をチャーターするのには莫大なお金がかかります。莫大な国費を投入する意義は何かと考えると、これには日本の文化や歴史が関係していると思うんです。たとえお金がかかっても船で行う国際交流には唯一無二の効果があると思います。一度、陸を離れる。そして海の上に出る。最初は参加青年一人一人が自分の国を背負って来ています。「僕はバングラデシュ人だ」とか「俺はスリランカ人だ」などと言っている。でも、船上で暮らすうちに、**自分のアイデンティティから「国」が引きはがされていく**んです。船の中では、グループごとに活動するので、そのグループ内でみんなが仲良くなつて、グループ内でのアイデンティティが育まれていきます。一方で、寄港して、寄港地活動が始まると、寄港地のデリゲーションの青年たちが非常に元気になります。

このような**「舞台のしつらえ」**が、もっと費用をかけずにできるかというと…それは無理でしょう。国際交流の場では、どうしても、ホスト国とゲスト国に分かれてしまいます。夜の自由時間にはみんな研修施設から外出してしまいます。電話もかけることができます。インターネットもつながっています。どうしても日常生活を引きずっています。でも、船では完全に日常生活から切り離されています。なぜ、こんなことに国がお金を費やしているのかと言われるかもしれません、逆に、それほど価値のあるものを日本は世界に提供しているのです。しかも、これまで毎年実施してきたんです。

日本は海洋国家です。海は世界につながっています。世界中の人々と仲良くやっていくために、日本は、船で国際交流事業を実施してきたのです。そうはいっても、100億円も200億円もかかるわけではありません。費用対効果で考えたら、かえって安いのではないかと思いますよ。**唯一無二の体験**なんです。**人生で生涯にわたってずっと続く関係性ができる**んですよ。私だって今でもその関係性が続いているんですよ。今の3分の1の予算で、参加者がすぐに忘れてしまうような事業であれば意味がないと思いますけれど、たとえ3倍の費用がかかっても、生涯にわたって残るのなら、それだけの值打ちがあるのではないでしょうか。しかも世界中からリスペクトされるんですよ。参加青年は、wonderful！とか、天国だ！と言って喜んでいるんです。民間で実施する国際交流事業と比べたら、**感動のレベルが全然違う**んです。自信を持って「日本だから、このくらいは当然です」と言えばいい。そうすれば、「日本はすごい！」とさらに感動を与え、日本の力を世界中に知らせることができると思います。

海と日本には深い関係性があります。日本はこれまで国として独立を保ってきましたが、その理由は、大陸から「遠からず近からず」だったからだと言われています。「遠からず」というのは、「文化や情報」は船によって運ばれてきましたが、大軍は渡ってくることができなかつたということです。日本を攻め取ろうとしても、海の上には「台風」という仕掛けが存在していて、多くの軍隊を船に乗せて海の上にいると、台風にやられてしまう。当時は、**船がある意味インターネットみたいなものだつた**んです。例えば、遣唐使は、文化を運んできましたが、軍隊は運んできませんでした。**海のおかげで、日本は船を通して適切なものを選び、独自の文化を発展させることができた**レアな国なのだとそうです。ですから、私たちは「船」や「海」をもっと大切にすべきです。日本は海に囲まれている国であること、周りにある海はインターネットのように世界中につながっていること、日本は世界中の人と仲良くやっていくために船の事業を実施しているということに誇りを持つべきです。

■事業参加の経験が現在のキャリアパスにどのように影響しているか

他の国の青年との成熟度を比べたとき、日本青年が未熟であると強く感じたことが、後に教育事業を始めた原体験につながっています。講演等でいつもこの話をしています。この確信は今でも変わっておらず、日本の若者は幼稚化（二極化）していると感じています。

社会がある程度物質的に豊かになると、生きるための生理的な欲求が満たされるので、目標を見失い、幸せを感じられなくなる。だからこそ、「目標」「価値観」が必要です。「目標を持ってはじめて、人間は生きる方向性を持ち、豊かさの軸を持つ」のだと思います。だから、いろんな人に出会う機会を子どもたちにも提供していきたい。自分の目標がまだ分からぬのなら、「何を目標にしたいのかが見つかるといいな」と探す体験が必要です。試行錯誤が必要です。様々な人、様々な体験に出会っていくうちに、なんとなく自分に合うものに調整されていきます。教育の理想は「教えられた」という意識すらなく、自分で「学べる」環境を作ることだと思います。ASK-NET を立ち上げたのは、最初のきっかけとなる「出会い」と、主体的な体験である「挑戦」ができる場を作るためでした。

「世界船」は私にとって**「主体的な挑戦・参画のための土壤」を与えてくれました**。自分の能力を試す場でした。これまでの数々の思い出の中でも、いまだに鮮烈なイメージで残っています。

■アパルトヘイトの影響が残る貧困地域を視察して

寄港地活動では、南アフリカのケープタウンに行き、ネルソン・マンデラ氏が幽閉されていた島と、まだアパルトヘイトの影響が残っている貧困地域を視察しました。貧困地域という場所を初めて見ましたが、私の地元にもこういう雰囲気の場所があったなあと思い出しました。もちろん、私の地元に掘つ立て小屋はありませんでしたが、昔の市営住宅の長屋みたいな雰囲気が感じられました。地元にあった駄菓子屋の雰囲気と南アのスラムにあるお店の感じが似ているんです。小汚いんですけど、なんとなく落ち着く雰囲気がありました。子供たちが楽しそうに外で遊びまわっており、見慣れない人が来ると興味しんしんでみんな集まってくるんです。隣近所の暮らしが非常に近い。戦後直後は、日本もあの貧困地域のような感じだったんでしょう。

貧困地域を視察して、**豊かさとは何か、教育とは何かと考えるようになりました**。勉強をがんばって、良い高校、良い大学に行って、豊かな暮らしをすれば必ず幸せになれるわけではありません。「豊かさ」は一つの目標にはなるけれど、手に入れたら、幸せがずっと続くわけではない。ですから、自分が本当に求めているものは何なのかを考えなければいけません。

ある時、青年の中に床に国旗を置くなど、国旗をぞんざいに扱う者がいて、問題になったことがあります。その時の南アフリカの青年が国旗に対して非常な愛着を感じている様子が印象的でした。「これは自分たちが作り上げた国旗なんだ」という誇りが感じられました。私もプロトコールの一つとして、国旗を大切に扱うべきことは知っていましたが、国民として勝ち取ってきたんだという南アフリカの青年たちの国旗に対する強い思いとは全く違う意識でした。南アフリカの青年が自分の足を指して、この傷は独立運動をしたときに弾があたった痕なんだと説明してくれたことがあります。本当に国旗に対する想いが深いんだなと思いました。

■船を用いた国際交流の意義とは

船は、一度出航てしまえば逃げ出せない閉鎖空間になるため、そこでの人間関係は濃密になり、**コミュニティをつくりやすくなります**。そのなかでできるだけ交流し、ディスカッションをすることで、**独自の文化が形成され**、その期間だけの**独立国をつくるような感覚**になります。グローバルシチズンシップの理解へつながります。また世界は海でつながっていることを強く理解できます。

交流事業では、**閉鎖空間の中でみんなが向き合うことが大事**なんです。向き合うことが自然にできればよいのですが、自然にできない場合は、「向き合うための」プログラムを作っているような、人工的な感じになってしまいます。意図的にお

膳立てしている感じです。私は、**教育にとって一番大切なのは環境設定**だと思っています。例えば、多文化の環境にいれば、多文化の意識が育つようになります。環境は人間の意識に影響を与えます。**環境を作ることが、最上位の教育**なんです。本人たちは教育されていることにすら気付かない。これが最も優れた教育です。このような環境を作ることができないときに行うのが、特定の状況を指示したり、ファシリテートしたりする設定です。これが真ん中のレベルの教育です。一番レベルが低い教育は、本に書いてあることをそのまま教える方法です。

船の事業の良さとは、閉鎖空間でありながら移動していることがあります。インターバルトレーニングができます。次の寄港地に到達するまでの間に、**自分たちを振り返るプログラムが自然に構築**されていきます。このプログラムが「自然に」提供されているのが船の良さなのです。「今からネイチャーゲームをやります」などと言ってわざわざ参加者を招集しなくとも、船の上にいるだけで、トビウオがぴぴぴーと飛んで行ったり、夕日が水平船上に沈んでいたりするのを日々自然に見ていられるのです。こういう光景を観察していると、世界って、地球って、広いんだなあと自然に感じられるんです。大陸の人だろうが、海なんて初めて見たという人だろうが、皆が共通体験として享受できる良さなんです。

船を活用したほうが、交流事業に特別感が増すという良さがあります。参加青年は、事業参加後にそれぞれの国で影響力を持つ人材となるわけですから、これだけの人材を育成できると思えば、安いものではないでしょうか。このようなすばらしい事業を日本が行っていることを！いろんな国の人をこの船によってつなぐ！インターネットの時代だからこそ、この事業が大事なのです！等々言えば、世界の人々から、wonderful!と言ってもらいますよ。

■事後活動

第10回「世界船」（1997年度）にナショナル・リーダーとして乗船しないかと声をかけていただきました。教育に打ち込もうとしていた時期でしたので、乗りたい気持ちがある一方で、迷いました。でも、この世界船をこれから自分がどのような人生を選択するか決めるために活用することにし、参加することにしました。

自分が参加した第8回「世界船」でできなかったことをやろうと思い、パソコン会社から協賛いただいた8台ほどのパソコンを船内のライブラリーに並べ、擬似インターネットの環境を作りました。下船後のネットワーク作りのために、途上国の青年たちにインターネットの使い方を説明しました。

船内での日々も過ぎ、あと1週間で下船するという時期になりました。ある日、「これから的人生で自分が何をすべきなのか。本当にそれができるのか」と海を見ながらよく考えました。「**教育分野で自分がどんな変化を起こせるのか賭けてみよう**」と決意しました。「複雑な仕組みの教育界に変化をもたらすには早くても20年、遅いと30年かかるかもしれない。できるかわからないけれど、自分の子どもが中学生になるまでをめどに挑戦してみよう」と覚悟を決めました。

下船後は、論文を書いて大学院を卒業し、愛知県私立学校教職員組合連合の仕事をしながら、1999年に「愛知サマーセミナー」をIT化することを手始めに、「ASK-NETプロジェクト」を開始しました。

現在では、私の仕事そのものが青少年育成活動になっています。私の講演では、世界船に触れることが多く、事業の存在を知らせ、まわりの若者たちに応募を勧めています。

■事業参加時の国際的・地域的な人的交流

フェイスブックでつながっている日本青年、外国青年ともに、時々会って話をしています。実際に一緒に仕事をすることもあります。IYEO関連でその後もつながりのあった人とは、現在、東海学生アワード等、「世界船」のカルチャーをいかしたプログラムづくりと一緒にやっています。

■既参加青年同士のネットワーク強化策について

今は、SDGs の時代ですから、「既参加青年」とか、OBOG という呼び方をやめたほうがよいのではないかと思っています。事業に參加したこと、船に乗ったことというのはあくまでもスタートにすぎない。過去を振り返るのではなく、常に現在進行形で活動しているようなチームにしていくことが大切です。世界では様々な共通の問題が生じていて、1 か国だけでは解決できない状況です。外交官同士の話し合いはどうしても自国の利益が優先されがちです。ですから、事業に參加した私たちは問題解決のプレーヤーとして力を尽くすために、人間関係のネットワークを活用する必要があります。唯一無二の仲間、友達によるネットワークを利用して自分たちには何ができるのかという問いかけを常にしていく。事業に參加した後、「終わった感」に浸ってしまわないような仕掛けがあるといいですね。SDGs とか、社会問題の解決を全面に打ち出して、2030 年までに● ●を解決する等の具体的な目標を定める。それぞれの国でこのネットワークを使って社会課題を解決する一人一人なんだという視点を忘れないようにする。たまたま会った人が内閣府事業の関係者だったりすると、急に距離が縮まって、あなたは信頼できる人だから、一緒にこれをやりましょう！という話になって、これまで進まなかつたものが一気に展開して、国を越えた国際的なプロジェクトになっていくかもしれません。こうした事例が複数出てくると、日本は地道だけれど、歴史あるすばらしい活動をしてきたということを世界に示すことができます。

毛受芳高氏プロフィール

名古屋大学工学部情報工学科卒業。名古屋大学大学院人間情報学研究科で脳の学習理論等を研究する認知科学を学ぶ。1999 年よりアスクネットを立ち上げ、2001 年に NPO 法人化。学校と地域の間をつなぐ「教育コーディネーター」事業を立ち上げ、「キャリア教育」や「情報教育」などを学校等で展開。2005 年から経済産業省「地域自立・民間活用型キャリア教育プロジェクト」を瀬戸市で実施し、キャリア教育推進協議会の立ち上げから、プログラムや実施体制を瀬戸商工会議所と協働で構築した。2007 年から経済産業省と全国のキャリア教育推進の中核コーディネーターをつとめ、「キャリア教育コーディネーター」の評価・認定の仕組みを構築。2012 年、一般社団法人アスバシを立ち上げ、愛知県内の 35 の高校に 3000 名を超える高校生のインターンシップを普及、高卒就職の新しい形「早活プロキャリア」を推進。東海若手起業塾実行委員会の代表をつとめ、東海地域の若手起業家の育成う。2001 年より 18 年にかけて、東海若手起業塾 経済産業省創業機運醸成表彰等多数の受賞歴あり。

